

第二百七十九話 航空部隊の協同、統一指揮、独立

大東亜戦争の太平洋戦域の戦いの死命を制したのは航空戦力であった。日本は陸海の航空部隊が並存した状態で戦いに突入し、試行錯誤した。戦争間の協同、統一指揮の状況等を概見する。

1 列国の状況

第二次世界大戦突入時において独立空軍を保有していた国は、英国(1918)、伊(1925)、仏(1933)、独(1935)である。米・ソの独立空軍創設は戦後の1947、1946である。

2 帝国陸・海軍の航空部隊運用の考え方

陸軍は地上作戦支援・協力がメインであり、海軍においては、一部において、「航空主兵論」が唱えられたが、大艦巨砲主義は健在であり、航空機は戦艦主砲の着弾観測と戦艦の制空援護と補助戦力と見做されていた。山本大将や大西中將は航空の重要性を十分に認識はしていたのだが・・・

3 日本の航空運用に係る動き

大東亜戦争前の段階では、空軍独立の契機があったと云う。第一次世界大戦後(1920)、独空軍独立(1935)直後、山下航空総監の独伊視察から帰国(1941)の3回、何れも陸軍側からの働きかけであった。また、陸海軍大教官の空軍独立に関する意見書を提出(1936)、大西中將「航空戦備に関する研究」(1937)等もある。

4 航空部隊の協同・統一指揮の模索、独立論

(1) 初期進攻作戦における協同

初期進攻作戦では、陸上・海上・航空部隊の協同は、ほぼ理想的に行われたと評価できる。目的が一致し、主導的作戦であり、事前準備の周到・綿密な協定、日本軍の練度等の然らしめるところであろう。

(2) 防勢期の協同、陸海軍部隊の指揮の統一に関する主張

1943/9末、大本営は、絶対国防圏の防備強化方針に転換するも、陸海の役割分担をも果たし得ず、ますます劣勢を強いられた。戦況の窮迫もあって、中堅参謀レベルから指揮の統一等が主張されるようになったのだが、・・・特に海軍首脳の反対によって実現には至らなかった。

(3) 捷号作戦における航空部隊 一部において指揮の統一

絶対国防圏の中枢マリアナ失陥(1944/6)を受けて、捷号作戦が計画された。捷号作戦の決戦兵力の中核は航空戦力とされ、「捷号航空作戦に関する陸海軍中央協定」が締結された。航空戦力の集中統合発揮を期すものであった。海軍は海軍指揮官の下での指揮の統一を希望したが、陸軍側は、陸軍航空機の性能・訓練上の限界から過早な消耗を懸念し、全面的には同意せず、特定正面のみは統一指揮、他正面は協同等となった。軍令部と連合艦隊の指揮の問題も絡み、複雑怪奇な指揮システムとなった。

結果的には、海、空、陸の部隊が米軍に逐次に各個撃破されてしまった。

何れにしろ、複雑な指揮組織、協同関係では、戦況に応ずる柔軟な陸海空部隊を運用を要する複雑困難な防勢作戦遂行は極めて困難であると云える。

(4) 本土周辺における作戦の航空作戦に関する陸海軍中央協定締結(1945/3/1)

指揮関係は協同が本旨であるが、協同作戦部隊指揮官は同一地に位置するのを本則するとされた。

5 海軍の反対で独立空軍は潰えたが、一部においては指揮の統一が実現した。海は陸に飲み込まれることを恐れたのか。相互不信極まりだし、それが国を滅ぼした。国家の命運よりも自己組織を優先するのか陸海軍は？ 残念だ。大局判断のできぬ体質？

6 先ず、独立空軍に何を期待するのか明確なアイデア・運用理念の確立が肝だ。

(了)